

台湾で戦後初となる信仰対象としての本物の神社

屏東・高士村に高士神社を再興

神職・本会会員 佐藤 健一さとう けんいち



再興された高士神社

神社再建の話聞いた台湾高座会

今から三年前の十一月、その前触れは突如としてやってきました。

台湾少年工出身者でつくる台湾高座会の大会に参加するため、松山空港から中壢に向かうバスに乗ったときのことです。台湾在住の本会会員の方と名刺交換するやいなや、「あっ、佐藤さんは神主さんですか！台湾で神社を復興したいところがあるんです。詳しいことは事務局長に聞いてください」と声を掛けていただきました。

振り返りますと、その言葉が私の現在を創出することになるうとは……。私はそのとき窓外の景色を見ながら、これだけ繁栄している街に神社の再興

など夢のまた夢だなあ、とぼんやり意識していたことを思い出します。

その後、台湾高座会との交流会の会場で本会事務局長の柚原正敬氏ゆはら しょうけいと早速面識を持つことになり、台湾で神社再建など本当にできるのかどうかについて聞いてみました。

晩餐会の席ということもあり、会場は賑やかな雰囲気で、柚原事務局長と歓談しているうちに、お酒の席でもありましたので「まあ、やってできないことはないんじゃないですかね」などと答え、「ですよね〜」くらいの話その場は終わりました。

ただ、私はそれを契機に台湾についての興味が湧いてきて、台湾高座会の旅行のすぐ後に一人で台北にぶらっと

行って、台湾人の信仰心という角度から調査を開始しました。

それ以降、毎日毎晩「台湾で神社を復興したいところがある」という話が走馬灯のように私の心を巡り巡るのです。そしてついに柚原事務局長に電話を入れ「あのー、例の神社を復興したいという地域はどこですか？」と聞いたところ「ああ、高士こうし神社があったのは高士村ですよ！」とだけ教えてもらいました。なぜあまり深くお聞きしなかったのかと言うと、現況を自分の目で見て、出来なければ出来ないと、出来るならば頑張ってみると、率直に判断したいと考えたからです。

高士村をネットで検索すると、すぐにNHKの「人間動物園」の件がヒットし、台湾でも最南端近くの山あいにあるパイワン族が住む原住民の村だとわかりました。

高士神社跡地を实地検分

私は以前から台湾の高雄に曾奥中さ

んという友人がおり、その友人にも高士村について聞いてみたところ、「原住民の村で、牡丹社事件が起ったところだよ」とのこと。その言葉に電撃が走りました。私がまだ日本大学文学部の学生時代、日本近代史でこの事件について熱く語っていた教授を思い出したからです。

なぜなら、当時、私にしては真面目に授業に出席して牡丹社事件の講義を聞き、試験もそれなりのことを書いたのにもかかわらず、その教授に単位を落とされるという「我的牡丹社事件」があったからでした。

ともあれ、一人で乗り込んで話し合っ
て、実現できるかどうか判断しよう



村の若者たちが囲う白布内で行われた招魂の儀（8月11日）

とあらかじめ心に描いていました。そこで、私は友人の力を駆使してレンタカーを借り、台湾原住民に出会う旅に出かけたのです。

NHK「JAPANデビュー裁判」

の原告ともなった陳清福（パラル・ロシン）さんは、屏東県牡丹郷の高士村に住んでいます。ロシンさんと連絡を取ると、集会所に村民を集めておくから、まず自宅に来て欲しいとのことでした。そこで、カーナビを使いながらなんの問題もなくロシンさん宅へ到着。ロシンさんが村長に電話をすると、消防の拡声器のサイレンが鳴り、「佐藤さんがきたぞ」と、何ともローカルな光景が展開されました。

しかし、これまで私が出会った台湾人とは顔立ちも言語もまったく異なる台湾原住民に出会い、なぜか心弾むものを覚えていました。また内心「やっと会えたよ！」という思いもわき起こっていたのです。なぜなら、高砂族や高砂義勇隊の勇猛さ、そして日本と台

湾が出会った牡丹社事件と、これまでたびたび歴史の表舞台に顔を出す彼らにぜひとも会ってみたかったのです。

集会所では二十名ほどの村民が集まっていました。その少なさに、私は内心「あまり興味が無いんだな」と少しがっかりしました。しかし、少ない参加者ながらも頭目、村長、県会議員など、そうそうたるお役職の皆さんもおいでになり、同時に本気さも感じられました。

小一時間ほどのこの会議で私は、この事案に取り掛かれるかどうかは場所を見てから決めさせてほしいと話し、終了後に神社跡地へ連れて行っていたことができました。神社跡地にはコンクリート製の基壇に、最近造ったと見られる立派な屋根が掛かっていました。ただし、その基壇の朽廃の著しさに「厳しいな、こりゃ！」と感じた最初の印象を今でも鮮明に覚えています。

すると、村の人々は私がいまひとつ乗り気でないことを見抜いたのでしょ

うか、「展望台に登ろう」と誘い、神社跡地のすぐそばに建ててある展望台で、ロンシンさん、華阿財さん、李文來さんが牡丹社事件の説明を語り始めました。眼下に、牡丹社事件が起こった八瑤湾を眺めながらの実にリアルな説明です。

その壮大な景色と山から吹き下す風の中で、ロンシンさんの弟で廟主をしている樹林さんも加わり、「立派な道路と公衆トイレも完備されている。こ

こはとても良い立地条件だ」と、それはもう必死で勧められ「佐藤健一、もう逃がさないぞ!」という気迫が感じられました。それはそう、私が逃げ出すような事案であれば、この後に取り組む人は出てこないだろうと、私もロンシンさんたちも感じていました。

そこで私は率直に再興資金についてと確認すると、さっきまでの気迫がスーッとなくなるのを感じ、瞬時に「お金はないんだ」と悟りました。

その日の夜はロンシンさんが用意し

てくれた旅館に泊まり、翌日、もう一度、一人でその旧境内地を何度も歩き回り、参道の幅や基壇の高さなどの寸法をきっちり測定しました。

さらにその翌日、もう一度、神社跡地とその周辺の県道、国道の状況、村の入口と出口などの現況を再確認し、ロンシンさんに「また来るから」と挨拶して村を後にしました。

日本と台湾の礎になる覚悟

そこから私の葛藤と格闘の日々が始まることになって行くのです。

毎日毎日、あの基礎の大きさと覆い屋根との間の空間、上下約二五〇センチの中にどれだけの立派な社殿が納められるか。それも、ほぼ自費で行うのですから、当然、材木屋さんや木地師さん、銅板屋さんにも一肌脱いでもらわなければなりません。

さらに案件が神社となると、建てて終わりではなく、今後、氏子とは親戚同然のお付き合いを末永くしていくこ



御遷座祭には多くの村民が集い、神前に踊りを奉納する高士村のおばあちゃんたち。この中にはNHK「JAPANデビュー裁判」原告の高許月妹さんもいた（8月11日）

とになります。となると、この身はやがて台湾の土になり、日本と台湾の礎になる覚悟がなければ容易に手がつけれません。

そこで、私も村民が本気なのか、村民も私が本気なのか、双方の話し合いが何度も続けられました。

話し合いの中で、私はいつも「現在の日本の繁栄は、その陰で台湾に支えられてこそもたらされている。それと同時に、この高士村は日台の友情の契機となった場所であり、そのことに対

しての恩を返すとともに、多くの日本人にも日台の歴史的経緯と、牡丹社事件に興味を持って欲しい」と考えていました。

この高士神社再興の件は、ロンシンさんはもとより、牡丹郷長で県議会議員もつとめた華阿財さんも、高士村長の李徳福氏を始め、学校方面、在地の宗教家、牡丹郷内の頭目筋の方々に訪問して理解を求めたそうです。

お医者さんで省議員を務めた李文來さんは、台湾政府や県政府方面に働き



再興された高士神社の神前で(写真右4:ロンシンさん、右5:華阿財さん、右6:屏東県文化処長、右7:佐藤氏、右9:牡丹郷長、右10:高士村長、右11:柚原氏。8月11日)

かけ、原住民の文化保存活動として神社を含めた公園整備の公共に与える有益性を呼び掛けてくれたそうです。

招魂遷座祭と御鎮座祭を斎行

お陰様で、いささか年月は掛かりましたが、高士村の全面的なご助力と友人たちの献身的な協力を得て、今年の夏、神社本殿の復興のみならず、氏子村民が希望していた御神霊を遷座し、信仰の対象となる本物の神社として、台湾においては戦後初となるこの事業を完成させることができました。

また、この神社公園は以前の姿から一新し、正面の参道は新しく石段を整備し、神社裏側の参道も石段を整備、土留の石垣の目地に至るまできっちり整備してもらいました。

こうした地元の皆さんの熱意もさることながら、高雄の友人の曾典中さんは高雄市内の友人に声を掛け、高雄を中心に日本時代の街並みや精神を啓蒙しているグループのリーダーである姚

銘偉さんに協力してくれるよう取り計らっていただきました。

最終の村民会議にはこのお二人も出席し、神社と道教はともに多神教で共通点が少ないことや、法律面からも問題がないことなどを説明していただき本心に強いものを覚ええました。

こうして、多くの人たちの惜しみない協力を得て、八月十一日の招魂遷座祭、翌十二日の御鎮座祭を無事に斎行できたことは、日台双方にとって歴史的な慶事であり、またとても美しい友情の成果でもあります。

最後になりましたが、この高士神社は御本殿があつて御祭神が祀られているだけで、狛犬も灯籠も賽銭箱もありません。本会会員の皆様には当事業の主旨をご理解いただき、奉賛のご協力を賜うことができましたら、より堅固に、より盤石に日台の友情を深めて参れると存じますので、ご賢察のうえ赤誠のご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。